

---

# ポストカードとあなた。

希里 凜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポストカードとあなた。

### 【Zコード】

Z7650B

### 【作者名】

希里 凜

### 【あらすじ】

落ち込むと郵便受けに入っている、綺麗な写真のポストカード。  
差出人は不明。。。。

(前書き)

初めての短編小説です。

そつと開けた郵便受け、その中には今でも食べたくなるような瑞々しいイチゴの写真のポストカード

が入っていた。

誰からだろう?

差出人は不明。

書いてある住所は、：オイシ荘202 時任万愉。トキナシマサエ

この私だ。

この日から差出人不明の綺麗な写真のポストカードは時々届くようになつた。

私の名前 万愉 沢山愉快な事がありますように。 。  
両親がつけた名前。

私はこの 万愉 という漢字が何故かとてもなく嫌い。

小さい頃からこれといった特技も無く、勉強も運動も普通で、どちらかと言えば鈍くさくて失敗してはすぐ落ち込んでしまうような子供で、それは大人になつても変わらなくただ普通に会社に通り普通に仕事してたまに上司に怒られ落ち込むと言う、愉快とはかけ離れた名前負けの人生を歩いている。

「時任万愉さん、いい名前だね」

「はい？」

そう声をかけてきたのは同じ課の進藤海都。

彼は仕事が良くでき、頭も顔も良く、おまけに性格も優しく文句の付け所がないと言つ少女漫画に出てきそうな男で社内NO.1と噂される男性だった。

「万愉。つて言つ名前」

そう、「」言つ進藤さんに私の心臓は爆発しそうになる。

「え、そりですか？」

緊張のあまり声が震えそう。

「うん、ずっといいことがありますようにって、そんな感じがする」

—そんな思いで付けたみたいなんです。うちの親…私は、この名前

の漢字好きじゃないんです

生送りであるから」  
「…………」

切り開いていかないとね

1

「がんばりう

۲۰

進藤さんはそう言い、私の肩をポンと叩いて歩いて行つた。

何なんだろう？

同期で入社し6年、同じ課に配属されて6年、仕事以外で話す事は二八が初めてだった。

一  
度  
は、二  
二  
はあ  
ト  
感  
じ  
事  
が  
あ  
つ  
た  
人

仕事で失敗しそうになつた時フオロ口くちしてくれた事が、一、二度あ

つたけど

『あつがとづけやれこました』『氣にしないでね』の会話だけでこいつ

も済んでいた

「そう言えば、同期の川本さん結婚するんだって」

「そ、う、な、ん、だ、あ、」

「あのブスがあ、」

ロックルームでの最近のみんなの会話はもっぱらこんな会話ばかり

四

28にもなると次々と同期が寿退社していくし、高校、大学の同級

生も次々と勝ち組み入り、なんてはしゃいで嫁にいく奴、中には仕事に成功、仕事一本キャリアウーマンになつた子、仕事も恋も上手に両立、家庭も仕事も両立と順風満帆な子もいる。

私は…どちらにも属さない。

恋も仕事もからつきしダメ。

『自分の人生は自分が愉快になれる様に切り開いていかないとね進藤さんに言われた言葉…。』

そうだよな、と思ひ。

今週は何もなく無事に済んだと安堵し、何にも変り映えしないいつもの通勤路を家に向かつて歩く、

路には季節を間違てるのか？もう少しに秋が来ているといふのひょううとした向日葵が咲いている。

「あんた、私みたいだね」

悲しそうに一人で咲く向日葵に私は話しかける。

向日葵、燦爛と照りつける太陽に顔を向けて元気に咲く夏の代名詞のような花。

なのには下を向いて、申し訳なさそうに咲いている。

「はあ…」

大きく深くため息をついた私の後姿に

「…わん」

誰かが声をかけた。

ん？

ここで私を呼びとめる人はいないような… そう思い振り向いた私の顔を二ヶ「コリ」と見つめる

「時任さん」

「…」

進藤さんが立っている。

「何してるの？」

「あっ、進藤さんっ！」

驚いて慌てて立ちあがる私に

「向日葵見てたの？」

と優しい声で聞く。

私は、ドキドキいつもより数十倍早く打つ心臓を押さえながら

「あ、はい。進藤さんはこんな所で何してるんです？」

「ちょっと用があつて。」

「そつ、そなんですか？」

「うん、そなんだ」

こんなところで逢うなんて……なんとも想つていらない進藤さんに運命みたいなものを感じてしまつ。

でも、運命を感じてしまつ。これはただの偶然であり、そんな事を感じてしまう悲しき乙女の様な女わたしは、

「では、また明日仕事場で、さようなら」

と一ヶ口の一礼をしてその場を早く立ち去り去りとする。

「あっ、时任さんっ」

そんな私の右手を進藤さんはとつ方に掴んだ。

「…。」

何なの……この展開？

私の右手を握る進藤さんの暖かい大きな手。

心臓の鼓動が早すぎて、身体が揺れてるみたい……氣づかれそうで振りかえれない。

「…」

夏から秋に変わる生温かいのか、乾いてるのか分からぬ風が私と進藤さんの間をすり抜けていく。

「好きなんだ…」

進藤さんが口にした思いもよらない言葉…。

私はそつと振り返り、進藤さんの顔を見上げた。

生温かいのか乾いてるのか分からぬ空氣の中を立りぬくしていった。

あれから私は進藤さんと付き合にはじめる。

進藤さんは私が初めての彼女ではないけど、私は進藤さんが産まれてはじめての彼氏だつた。

「進藤さんお願ひします」

「はい」

会社では気づかれないようにいつも同じ様に接する一人。

帰りはあの向日葵が咲いていた場所で待ち合わせをして、私のアパートと一緒に夕食を作り食べた。

今私は何をするのも楽しく、あんまり好きではなかつた掃除なんかも鼻歌を歌つてしまつぐらい楽しくて仕方ない。

今は何もかも幸せで仕方ない。

でも、そんな日々ひとつ気になるのは、最近郵便受けに入らなくなつたポストカード。

落ち込んで塞ぎ込みたくなる時、気づくといつも入つていた。心が暖かくなるような桜の花、綺麗な赤色の艶があるリンゴ、黄緑色から黄色のグラデーションが綺麗なバナナの写真…なんでバナナなんだろ?~くすつと笑い落ち込む私に元氣をつけてくれる写真。

そんなポストカードが届かないのは少し淋しい。

それはきっと今の私が幸せだからかな?でも、誰が送つてくれたんだろう…?

進藤さんと付き合い始め、季節は夏から秋に、秋から冬へと当た  
り前のように変わっていく。

そんなある日、私は予想もしなかった、でも社内のみんなは やつ  
ぱりね、お似合いだもんね。 と口を揃えて言う美人で性格もよく  
仕事もできる社長秘書の川島有紀と進藤さんができていると言ひ噂。  
彼女の私が言うのもなんだけど、本当にお似合いの二人。  
社内NO.1の男と女。

「すごい噂がたつてるね。」

いつもの様に待ち合わせする場所で待っていた進藤さんに後ろから  
声をかける私。

「…万愉。」

寒そうに申し訳なさそうに私を見る進藤さん。

本当なのかな？って聞きたいけど怖くて聞けないし、どうして私が  
いいんだろう？なんて思うけど、  
とても囮々しくて聞けない。

「綺麗だよね、川島さん。」

「何言つてんだよ。」

「…。」

否定も肯定もしない進藤さん。

もう少し上手く感情を出せればいいのに…。

不安と信じる気持ちが交差する…。

そんな時、また私の202の郵便受けに、可愛い北欧製かなと感  
じる暖かいクマの木でできた人形の写真が届く。  
元気出せ… そう言つてるの、彼を感じてやれと言つてるの?  
この差出人不明のポストカードで沈んだ気持ちが少しずつ回復して  
ゆく…。

「ありがと…」

もう時期、一人で初めて迎えるクリスマスがくる。

入社した初めてのクリスマスはコンパだのなんだのみんな一生懸命相手を見つけていた。

クリスマスなんてどうせ…とブルーに落ち込んでいた私が初めて迎える彼とのクリスマス。

あの噂は何時の間にか風と共に去り、私は進藤さんにあげるクリスマスプレゼントの事で頭がいっぱいになる。

「「これがいいんじゃない？」

「うーん」

大学の頃から仲がいい智と一緒にクリスマスプレゼントを選びに来ていた。

彼女は社内で唯一私と進藤さんの事を知っている友人。クリスマスにあげようと思うネクタイを一つ見比べてる。

「進藤くん…年のわりに落ち着いてるからね。」

「「うちのがいいよね？」

「うん、そうだね」

「じゃあ、うちにしてよ」

薄いグレーにライトブルーのストライプのネクタイを買う。

「さつ、終わつた。」

「終わった、終わった。後はクリスマスを待つだけ。」

「今年は一人とも淋しくないね~」

「そうだね~、ご飯でも食べてくか?」

「だね~」

そんなのん気に笑つて歩く一人は、イタリアンレストランの前で社長秘書の川島さんが誰かを待つて居るのに気づく。

「あっ、川島さん」

「ほんとだ、彼氏と待ち合わせかな?」

「川島さんってどんな人と付き合うのかなあ…」

以前進藤さんと噂がたつた彼女、どんな人と付き合うのか?私と智

は興味本位でしばらく遠い所から見ていた。

「あつ、来たよ、万愉」

しばりくして走ってきたのは、背の高いスースをきた男性。

「川島からじや、顔が見えないね

「ん、近く行つて見ようか?」

「うん。」

通行人のように氣づかれないようにそつと人をかきわけ近づく一人。

川島さんの相手の男性はふと私達の方に振り返る。

「あつ」

「あつ」

進藤さん…どうして?あの噂は本当なんだったの…?私…。

「万愉」

「そうだつたんだ…」

「酷いよ、進藤くん…?」

「違うよ。」

「何じうしたの、どうこう事?」

何が起つたか分からぬ川島さん、進藤さんと私の顔を交互に見てる。

そうだよね?私と進藤さんの事なんかみんな知らないもんね。

「進藤くんと时任さんつてもしかして付き合つてたの?」

「あ、うん。そなんだ」

遠ざかるみんなの声と雜踏…。

「私、帰るつ…」

もういいや、もういい、こんな結末で。

「万愉つ!」

振り返る私の左手を掴む進藤さんの右手。

「進藤さん、もういいです」

「ま…聞いてよ、俺の話を…」

焦つた顔の進藤さんも、驚いた様子の川島さんも、もうこいや、なんでもいいや。

「ここまでで、いいです」

「な、何言ってんだよ？」

私の手…握り締める進藤さんの手。

少し痛い…。

「ありがとう」

「万愉？」

私は、何も聞かずもう一つの手で進藤さん手を離す。

「さようなら」

聞いてもいいのに何も聞かず、その場から離れた。

心配した智は何回も電話とメールをくれる。

追いかけてくれない進藤さん。

進藤さん…結局、進藤さんから呼び名を変えられず終わるのかな?。

何も聞かずに勝手に終止符を打とうとする。

不器用過ぎて、なんでもマイナス思考に持っていく私…人に甘えられない私…。

あつた、私の特技、すぐ、落ち込むこと…。

次の日、生理休暇で仕事を休む。

どんだけ嫌なことがあっても仕事だけは休みたくない。どれだけ仕事ができなくとも仕事だけは休みたくない。でも…。

社内恋愛は別れた事後が嫌なんだな…と知る。

『別れよ』とも言われてないのに顔が見える距離にいられない…。こんな時…あのポストカードが入つてればいいのに…もしかして?私は、決して誰にも見られたくない赤いちゃんちゃんこを着て、郵便受けを覗きにサンダルを履いて、階段を降りる。

「あつ…。」

私の郵便受けに、鮮やかな色のポストカードを入れる人…。

「…」

「それ？」

私はポストカードを指差す。

「はい…これあげる」

優しい声でニツコリ微笑み、

鮮やかなブリティッシュグリーンのもみの木に飾られる色とりどりのオーナメント…クリスマスツリーの写真のポストカードをそつと差し出す。

「ありがとう」

「どういたしまして。」

恥ずかしそうにお辞儀する。あなただつたんだ…

思いもしなかつた、そんな事するなんて想像すらをできない…落ち込む私にいつもポストカードを送つてくれたのは、私をずっと見ていてくれたのは…あなた。あなただつたんだ。

「似合わないよ…こんな事…」

「ばか、うるさいよ。」

照れくさそうに言つあなた…

こんないい男がそんな事するなんて思いもしない…。

勇気をふりしぼつて言おつ。

まだ言つてなかつた事…一度も口にしてあげていない言葉。

「海都、好きだよ」

「万愉、俺も好きだよ」

(後書き)

いかがでしたか?。

初めて短編小説、最近元気のない自分への応援のつもりで書きました。（やっぱり主人公が暗くなるけど。。。涙）

短編は短い中にすべてをいれないといけない感じがしてとても難しいと思います。

たぶん意味不明な感じが多くあると思います。  
感想などいただけたら嬉しく思います。

希凜希

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7650b/>

---

ポストカードとあなた。

2010年10月11日01時23分発行